

天理大学ふるさと会報告書



広島の思いに寄り添い、平和と向き合う
—広島市における現地調査を中心として—



外国語学科英米語専攻 4年 青井彩恵

目次

はじめに	2
広島市民生活の復興	3
原爆投下の瞬間とその後	5
私が考えた平和、そしてどう伝えられるか	8
おわりに	8

はじめに

この度、ふるさと会国内研修に行かせていただき、ありがとうございました。小学生の頃から行きたかったカナダに行くことができなかつたのはとても悔しいです。しかし、大学生生活最後の春休みに、多くの学びを得られたことに喜びを感じております。研修に行くにあたり、ご支援くださった皆様、本当にありがとうございました。

・なぜ広島を選んだのか

第二次世界大戦から 77 年になる今年。もうすぐ 80 年になろうとしています。私の世代は祖父母が戦争を経験しているか、していないかの瀬戸際の世代です。

私は幼いころから、戦争や平和について興味はあったものの、授業や校外学習で学んだことは少ないと感じていました。そこで、毎年テレビで目にしてきた広島の記事で映る遺構の数々を実際に見学したいと思立ちました。今年の 2 月中旬、毎日のように報道されていた内戦や戦争のニュースをどこか他人事として捉えてしまっていた自分がいました。そんな日常を、「平和とは何か」を考えるきっかけとし、変えていきたいと思ったことがきっかけです。

・原爆投下当時

広島は、1945 年 8 月 6 日、午前 7 時 9 分、警戒警報のサイレンで叩き起こされました。この時はアメリカ軍機 1 機が高々度を通り過ぎていただけだったため、警報は午前 7 時 31 分に解除されました。一息ついた人々はそれぞれの 1 日を始めようとしていました。この時、広島中央放送局では、情報連絡室から突如、警報発令合図のベルが鳴りました。1 人のアナウンサーが原稿を読み上げた瞬間、すさまじい音と同時に、鉄筋の建物が浮くのを感じ、体が宙に浮いたといいます。午前 8 時 15 分、人類史上最初の原子爆弾が、広島に投下されました。

私が、今回の研修の目的は 2 つありました。

1 つ目は、平和とは何かを、見聞きしたことを基に自分なりに考えたい

2 つ目は、将来教員になったときに、子供たちに何を伝えられるかを提案したい

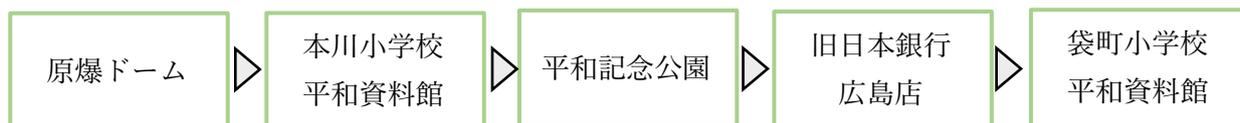
この 2 つの目的を達成するために現地調査に行ったので、本レポートでは、しっかりと

振り返りをしたいと思います。

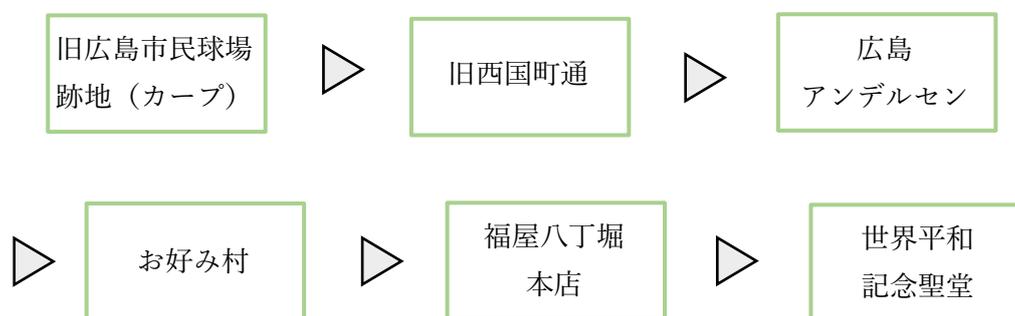
・HIROSHIMA PEACE TOURISM

私は今回、広島市経済観光局観光政策部が運営する、HIROSHIMA PEACE TOURISM のおすすめルートを巡りました。私が今回巡ったルートは3つあります。

① 被爆当時の痕跡を残す被爆建造物を巡るルート



② 市民生活の復興を巡るルート



③ 被爆に関する資料館を巡るルート



被爆前後の文化・文学を巡るルートもあり、美術館を巡る予定だったのですが、コロナウィルスの影響で、広島観光ループバスが運休だったため、巡ることができませんでした。

① と③のルートでかぶっているところはありますが、資料館は③のルートで巡りました。

2. 広島市民生活の復興

HIROSHIMA PEACE TOURISM で「市民生活の復興を巡るルート」を辿った際、原爆投下後もめげずに前を向き、広島を立て直そうと懸命に動いた市民の魂が感じられました。また、この悲惨さに目を背けず、後世にも伝えていこうという強い決意も見られました。

・広島アンデルセン

旧西国通り、現在の本通りに位置する、ベーカリー広島アンデルセン。おしゃれな外観で、行った時も賑わっていました。こちらのアンデルセンがパン屋を始めたのは、1948年 被爆後のお話ですが、1967年に取得した建物が、原爆を耐えた建物だそうです。しかし、耐震性能の不足と設備老朽化に伴い、2016年に閉店し、建て替えを行いました。建て替えにあたっては被爆建物としての歴史的意義に鑑み、その保存に関する検討を重ねた結果、被爆当

時のまま残る旧建物東面の 2 階外壁を切り出し、新店舗外壁に再設置するとともに、後年の改修により失われていた本通り側正面の列柱を再現したといます。「通商店街に残る唯一の被爆建物として、広島原爆の実装と復興のストーリーを伝えていく」と、2020 年、決意を新たにしていました。

・福屋八丁堀本店

1929 年 10 月 1 日、広島市八丁堀に広島最初の百貨店としてオープン。1938 年 3 月、ひととき目を引く新館が完成し、“白亜の殿堂”と親しまれたそうです。原爆投下直後、新館と旧館はかろうじてその姿の一部をとどめました。半年後、1 階部分だけを整え営業を再開しました。着々と復旧工事を進めていき、原爆投下から 9 年後、全館復旧を遂げました。今もなお、90 年続く老舗「皆様の福屋」として凛と佇んでいました。

私は、わずか半年で営業を再開できたことに感動しました。地域に寄り添う百貨店だからこそ、そのようなスピードで再開し、いまもなお愛され続けているのかと考えました。

・世界平和記念聖堂

世界平和威年聖堂は、原爆投下で犠牲になられて方々の追憶と慰霊のために、またすべての人々の友愛と平和のしるしとして建てられ、国の重要文化財にも指定されています。外には、教皇ヨハネ・パウロ二世の銅像がおかれていました。この方は、1981 年 2 月 25 日に広島を訪れ、全世界に向けての平和アピールと祈りを捧げたそうです。「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です」と言ったそうです。中は、誰でもお祈りできる場所となっていて、とても広かったです。私が行ったときは誰もいませんでしたが、別の場所で賛歌をうたっている人たちの声が聞こえてきました。



↑旧広島球場跡地（カープ）



↑セントラルリーグ優勝記念碑
←世界記録達成記念碑（衣笠祥雄）

3. 原爆投下の瞬間とその後

・原爆ドーム、平和記念公園

原爆ドームと平和記念公園は、見た瞬間、「毎年テレビで見ているところだ」と、感嘆しました。原爆ドームの迫力は思っていたより何倍もあり、何度も改修を繰り返しながらも、戦後 80 年近く経つ今もそびえたつすごさを感じました。平和公園は、桜が咲いていて、市民がお花見を楽しんでいました。その光景がなんだか平和を感じた瞬間でもありました。平和の鐘の近くには全国から届いた絵や折り鶴が飾られていました。そこで私は初めて知ったのですが、毎日平和公園に訪れる観光客のために、折り鶴をお供えできるところが開かれていました。一羽からでもお供えできるので、私も折ってきてお供えできれば良かったと思いました。

・袋町小学校平和資料館

袋町小学校は、今もある小学校です。原爆ドームの近くにある学校でした。資料館は、袋町小学校の校舎内の片隅にあり、校舎建て替えを行う前の、西校舎を使い、資料館を開いていました。この校舎で生き残ったのは、生徒 2 人だそうです。そのうちの 1 人ものちの後遺症ですぐに亡くなったそうです。残った 1 人は、この悲惨さを伝えようと、のちに結婚した旦那様と、各地で講演を開いたそうで、今も生きておられます。資料館の地下に行くと、原爆の跡がそのまま残っていました。いろいろな資料を見ていくうちに、写真撮影不可ではなかったのですが、とても撮る気にはなれませんでした。子供たちが登校し終わり、いざ授業を始めようと思ったその時に原子爆弾が落とされました。近すぎて、光だけで音すら聞こえなかったと言います。上記で生き残った 1 人の女の子（当時）は、グラウンドにでる準備で、靴をはこうとしていた時です。何気ない日常が一瞬にして奪われたことが資料を見て感じられました。

・平和記念資料館

平和記念資料館では、被爆した人々の写真、建物のがれき、着ていたもの、日記、家族にあてた手紙、原子爆弾の真相が飾られていました。初めて目の当たりにする悲惨な光景でした。テレビで見聞きするのとはまるで違う、胸が打たれる凄まじいことばかりでした。被爆直後、水を求めに川へ行く学徒たちの絵、自分も罹患しているのに救護をする医師、看護婦、包帯を頭に巻きながら罹患手続きをする警察官の写真。見ていてとても苦しくなって、懸命に生きようと、生きさせようとした人々の底力も感じました。

資料館を一通り見終わった後、1 階にガイドさんたちがいて、無料だったので、ガイドをお願いし、上田さんという方に平和記念公園の中を案内していただきました。平和公園の中にはお寺もあり、原爆被害で亡くなった人を受け取り手が見つかるまで祀っているそうです。近くに名簿もあり、受け取り手が見つかった方は、線で消されていました。平和の鐘に案内されたとき、子供たちが作ったことを初めて知りました。資料館でも見たのですが、

佐々木貞子さんという女性が作ったそうです。彼女は2歳のときに被爆し、10年後の2月に白血病を発症し、その年の10月に亡くなりました。ここでも私は、原爆の被害者は後遺症にも苦しめられたのだと知りました。その貞さんが、もう2度とこの悲しみを生まないために平和の鐘を作ったそうです。鐘の中の下にある石には「これはぼくらの叫びです これは私たちの祈りです 世界に平和をきずくための」と刻まれていました。

被爆したことを理由に結婚できない人もいたと、上田さんは教えてくださいました。後遺症を発症し、うつってしまったら嫌だからという理由からです。なので、自分が被爆者であることを隠していた人もいたそうです。自分は被害者なのに、ずっと差別を受ける対象にならなければいけなかった、隠し通さなければいけなかった人たちのことを思うと、すごく胸が苦しかったです。

上田さんのおじいさんは、原爆が落とされたところから数キロメートル離れたところにおいて、まぶしくて左目を開けられなかった次の瞬間、周りが真っ暗になったといいます。逃げなければと思い、逃げようとする、被爆者が走っている彼の足をつかみ、「水をくれ」と入ったそうです。でも、まずは自分の身を守らなければと必死に逃げたそうです。みんな、何が起こったのかわからない中、自分自身を守ることしかできなかったのだと思いました。それだけ切羽詰まっていたのだなと感じました。

ガイドの終わりに上田さんが、「僕が今日話したことは、全部を覚えていようとしなくてもいいです。日本の都市にこんな被害を受けたところがあるのだと知っていてくれるだけで僕は嬉しいです」と話されていました。



原爆ドーム



平和の鐘



平和の鐘の後ろに飾られている折り鶴やメッセージ

ガイドしていただいた上田さん

3. 私が考えた平和、そしてどう伝えられるか

3日間、実際に広島に行き、見聞きしたことから、平和とは何か、自分なりに考えてみました。

私が考える平和は、「このお話が後世へと受け継がれること」だと思います。原爆の被害を口だけではなく形として残すことで、まったく戦争を知らない世代にも知らせることができる、そこから感じたことを各々が誰かに伝える。そういうループができることが、平和へつながる第一歩なのではないかと感じました。戦争がないことが平和であるとは考えていません。しかし、私が日本は平和だと思うところは、戦争や自然災害の脅威を発信できる場所にあると考えました。私はこの3日間で、原爆が何気ない日常のほんの一部分で起こったことだけれど、何十年にもわたり苦しんでいる人たちがいたことを知りました。同時に、もう2度とこの悲しみを味わってほしくないと思いました。私も次の代へつなげたいと思ったのです。

私の2つ目の目的、「将来教師になった時、子供たちに何を伝えられるのか。」私は、英語の教員免許を取ったので、この3日間のことを英語のスピーチにまとめ、子供たちに聞いてもらいたいと思います。それだけではどうしても主観が入ってしまうと思うので、何かほかの、広島原爆について、資料映像を流せたらいいと思います。それを踏まえ、子供達には英作文を書いてもらい、子供たちにも「平和とはなにか」を考える時間にしてもらいたいと思います。

4. おわりに

私は幼いころから戦争について、自分事のように胸を痛める傾向にありました。毎年放送される広島平和記念式典は必ず見ていましたし、戦後70年の特別ドラマなどは親と一緒に見ていました。でも、自分からなにか行動を起こし、戦争について積極的に知ることはありませんでした。

実際に、この3日間で現地に行き、自分の知らなかった世界を目の当たりにしました。表面上の事だけを見ていたのだと痛感しました。初めて知ること多かつたし、現地に行き、今の広島を肌で感じたからこそ、この3日間は有意義だったと自信をもって言えます。

まだ、ウクライナとロシアの戦いは終結していません。でも、今の戦争も、第二次世界大戦も、決して罪のない一般市民が犠牲になっていることだけは確かです。「戦争は悲しみと憎しみしかうまない」資料館で見た言葉です。その言葉は、今のウクライナの現状を見てもわかります。2月の時点で、どこか他人事として捉えていた私ですが、今は違います。一刻も早くこの戦争が終わることを切に願っているし、これ以上市民を犠牲にしないでほしいと思っています。戦争はその瞬間だけではなく、そのあとも悲しみは続き、連鎖することが分かったからです。

このたび、天理大学ふるさと会国内研修に採用していただき、本当にありがとうございました。大学最後の最後に素敵な思い出と学びを得ることができました。心より感謝します。